

() 内の福音

(ヨハネ七・五三〜八・一一)

校正用語に「見え消し」がある。元の状態が分かるように取り消し線を引く等の方法で修正を加えるものだ。簿記の赤二重線+訂正印もその一例だし、最近では facebook でも訂正すると「編集済み」と書かれ、クリックすると編集前の状態が分かる。ある意味「消せない」。メディア・リタラシ―が試されている今日この頃である。閑話休題。今朝の箇所は「」でくくられている。どういうことかと言えば学者たちの研究によればこの箇所は本来の第四福音書には収められていなかったことが確定であるということを示しているというのだ。とはいえこの箇所は伝統的に教会においてよく用いられており、クリスチャンであれば一度は聞いたお話である。そこを勘案して、「」で括っているのだ。以下この「」の中に展開されている福音を解き明かしてみたい。

一、「道ならぬ恋」ではない

この箇所は新共同訳聖書では「わたしをあなたを罪に定めない」となっているが、長く「姦淫の女(例・新米国

標準訳)」という表題で親しまれてきた。

「姦淫」を辞書で引くと「男女間の倫理に背いた関係」とあり、我々現代人は「道ならぬ恋」「アバンチュール」「両成敗でいいじゃない(ー)」のようなものを想像してしまいがち。しかし学者たちはそれを支持しない。その最大の証拠はこの「現場」に居たのが女性だけであったということである。研究者たちはこの女性性は「仕方なく」このようなことを生きたるために行っていた女性ではないかと推定する。社会の底辺で、生きるため、喰らうために淪落していた彼女。確かに行っていることは正しくない。とはいえ彼女も「生きていく」のだ。しかしイエスを訴える者どもはイエスを陥れるために、この名も知れぬ女を「道具」にしてイエスを追い詰めようとしたのだ。

二、人の「罪」は深い

この物語には①「現場」で取り押さえられ、真ん中に「置かれて」おびえる女、②彼女を取り囲む群衆たち。③ここぞとばかりに訴える律法学者とパリサイ人達、そして④イエスが居た。そこにあった空気は一言で言うならば罪そのものだった。目的達成のために人を非人間化してモノのごとく扱う律法学者とパリサイ人に邪悪を見るのは簡単なことだ。群衆たちはどうだろう。そこには無邪気な邪悪さがある。物見高さ、好奇心が彼

らを突き動かす。彼らはこれから始まるであろうショックな出来事に期待さえ抱いていたのかもしれない。また「身持ちが悪いからあんなことになるよ。自業自得だわ」という思いから石を準備していたものもいたかもしれない。彼らには憐みも、更に言えば内省もないのだ。一本指をさしたなら、残りの三本が自分を向いていることを忘れて彼らはこれから始まるであろう惨劇のスリルを楽しもうとさえしていたのだ。

三、イエスは「赦す」お方

そのような「人」の邪悪さが天にも届きそうになったその時、扇動者たちを相手にしていなかったイエスは立ち上がり、言った。「罪のない者が、彼女に最初に石を投げなさい。」と。その瞬間、時は止まった。一撃必殺、電光石火のカウンター。イエスに内省を迫られた人々は年長者から女の元を去り、気が付けば包囲は解かれ、イエスを訴えていた者たちもいつの間にかその場から立ち去っていた。想像するに、イエスは怒鳴るようにならなく、弁舌爽やかに言ったのではなかったろう。むしろ徐に立ち上がって静かに、しかし決然と語ったのだろう。その時人の罪は明らかにされた。それだけではない。我々の知る通り、本来イエスこそ「罪のない者」だから彼には彼女を罪に定めることが出来たはずだ。しか

しイエスが宣言したのは赦しだった。こうして彼女は命の危険から救われた。とはいえイエスは最後に「今からは決して罪を犯してはいけない」と言うことを忘れなかった。イエスの愛において愛と正義は一つなのだ。

* * *

明日の *News* スペシャルで『二人の贖罪―日本とアメリカ・憎しみを超えて』が放映される。取り上げられる人物は以前にも紹介した真珠湾の英雄、トラトララの淵田美津雄と日本軍の捕虜から宣教師になったデイシエイザー宣教師という二人の元パイロットである。しかし淵田がキリスト教に入信するきっかけはその少し前、帰還兵から一つの実話を聞かされたことにある。話はこうだ。日本軍捕虜たちにとっても親切にしていた看護師にある捕虜が「どうしてそんなに」と尋ねたところしばしの沈黙の後、「両親が日本軍に殺されましたから」という答えが返ってきたという。破たんした口ジックだ。だが宣教師であった両親の殉教直前の明鏡止水の平安な心を持ったとき、彼女の中にあつた憎しみは愛に変えられたという。友よ。私たちはキリスト者である。赦しを得た以上、キリストに倣い、愛に生きることが求められている。愛に生きる者になろうではないか。主が助けて下さる。アーメン。